

【第4回知の市場年次大会】

2013年前期:「サイエンスコミュニケーション実践論2
～リスクコミュニケーション入門」

2013年後期:「サイエンスコミュニケーション実践論1」

2013年2月7日

一般社団法人 日本サイエンスコミュニケーション協会 (JASC)

佐々義子

一般社団法人

日本サイエンスコミュニケーション協会

設立：2012年1月

設立趣旨：

サイエンスコミュニケーションを促進することにより、社会全体のサイエンスリテラシーを高め、人々が科学技術をめぐる問題に主体的に関与していける社会の実現に貢献します。

設立時代表理事 有馬 朗人

設立時理事 縣 秀彦

設立時理事 小川義和

設立時理事 北澤 宏一

設立時理事 北原 和夫

設立時理事 田代 英俊

設立時理事 高安 礼士

設立時理事 美馬 のゆり

設立時理事 渡辺 政隆

設立時監事 尾嶋 好美

設立時監事 真山 武志

JASCの活動

○協会誌発行

○年会・例会・特別研究会開催

例) 2012年12月1-2日 第1回年会開催

○ネットワークの形成

・イベントでの連携

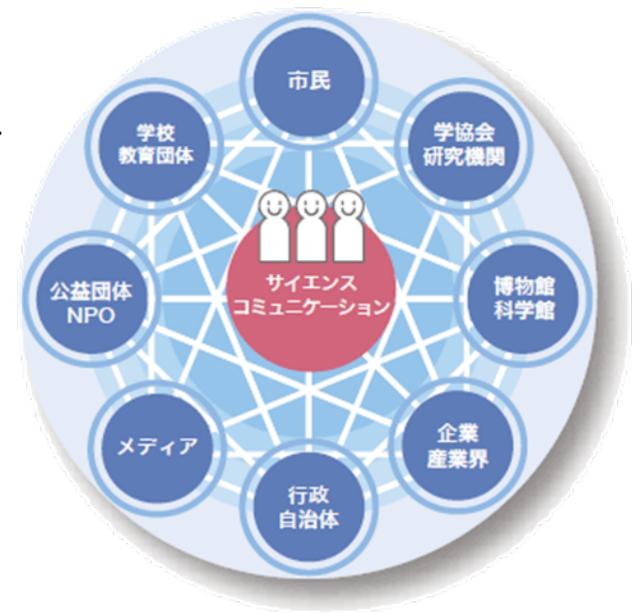
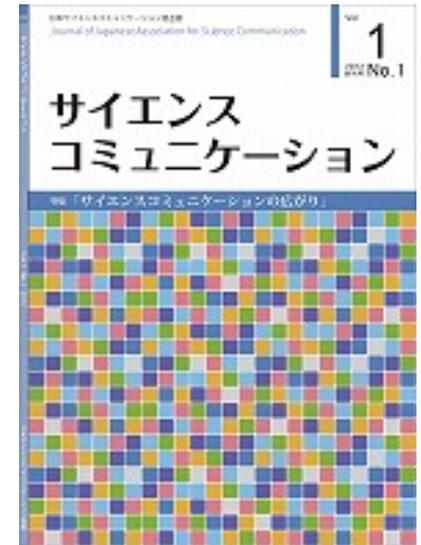
例) サイエンスアゴラ

東京国際科学フェスティバル

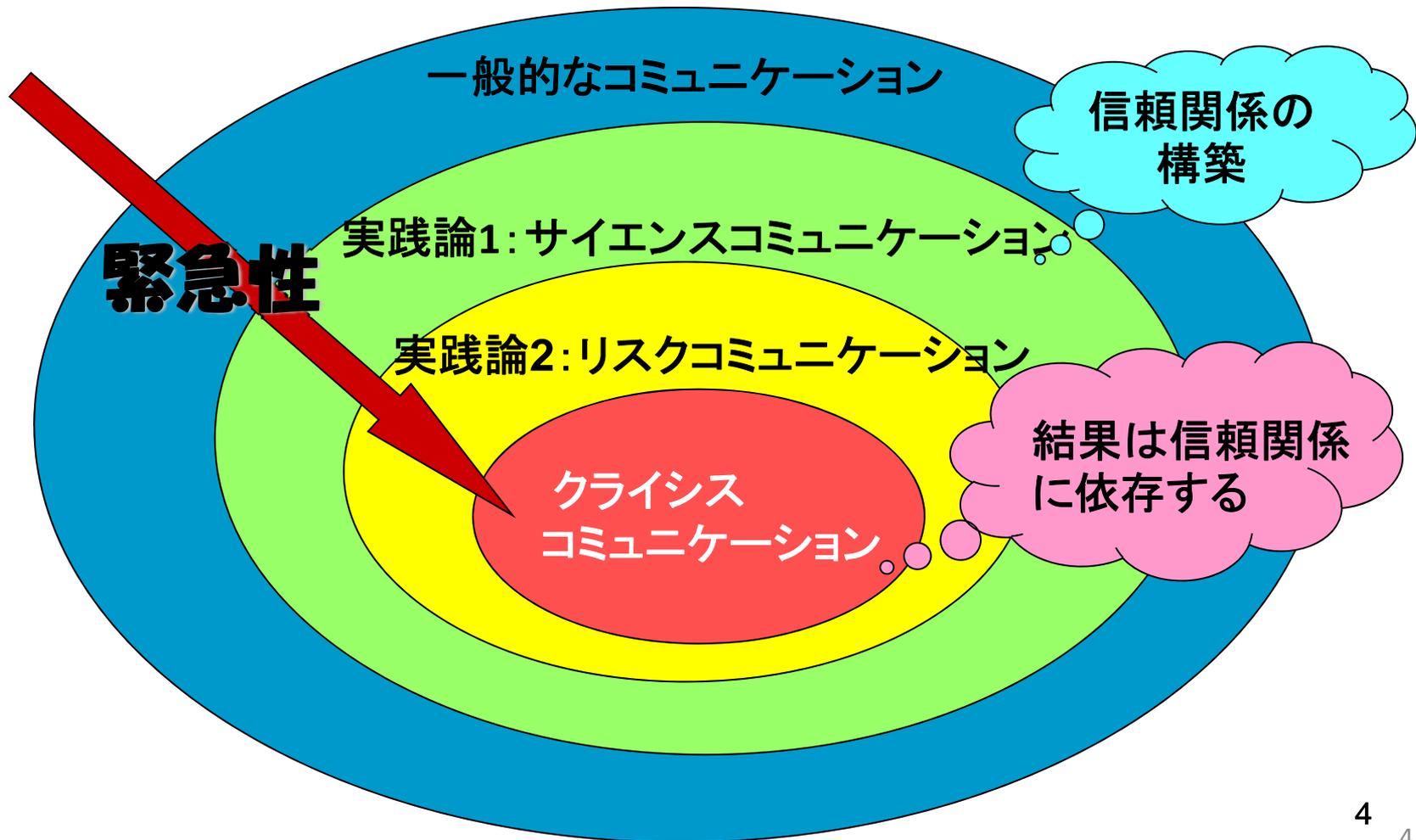
理科好き市民主催のカフェ

・地域グループの連携

例) 静岡科学館る・く・る



サイエンスコミュニケーションと リスクコミュニケーション



科目名 サイエンスコミュニケーション実践論1

副題 21世紀の産業技術リテラシーを展望する

- **講座のねらいと概要:**

- 21世紀の今日、「知識のための科学」や「産業のための技術」に加えて「社会における、社会のための科学技術」がいわれ、その本質を理解し活用することで、社会の課題に主体的に関与し判断できる「科学技術リテラシー」が求められることとなった。
- サイエンスは利便性だけでなく、精神的に豊かに生きるための文化となり、サイエンスコミュニケーション活動が重要な役割を担うこととなった。
- 科学技術に対する理解・関心・意識を深め高め合い、多様な意見の合意形成や政策等への反映、協働して課題を解決していく「サイエンスコミュニケーション」の活動事例を紹介し、その理論と実践的技術を学び、産業技術社会の健全な発展につなげる。
- サイエンスコミュニケーションの実践としてサイエンスカフェを実施する。

科目名 サイエンスコミュニケーション実践論2

副 題 リスクコミュニケーション入門

講座のねらいと概要:

- サイエンスコミュニケーションの手法開発や評価が、文献調査やアンケート調査などを中心とした研究や実践例の分析を紹介する。
- 生活と密接な関係を持つ科学・技術のリスク(感染症、くすり、食品添加物、遺伝子組換え作物・食品など)をめぐるコミュニケーションを実践している専門家から、現状・課題について説明する。
- 受講生は、各自が直面したり、関心を持ったりしている事象に関するリスクコミュニケーションに当てはめて、自分の問題として捉え、共考する。
- 特定のリスク情報を伝えるリスクコミュニケーションの場を想定し、どのように伝えたらよいか、どのような場を創出すると対等な対話ができるのか、を考えながら演習を行う。
- 演習では、評価表を用いて、互いのリスクコミュニケーションの評価を行い、今後の活動に役立てるようにする。

開講講座

2012年後期、2013年後期

サイエンスコミュニケーション実践論1

サイエンスコミュニケーションの拡がり	サイエンスコミュニケーションの理論 天文台・科学博物館におけるSC サイエンスアート
産業技術と社会	産業技術誌概論 科学技術と社会の関係 先端技術と社会の関係
SCの理論と技術	サイエンスコミュニケーションのデザイン サイエンスライティング
サイエンスコミュニケーションの実践	演習 サイエンスカフェ

2013年前期

サイエンスコミュニケーション実践論2～リスクコミュニケーション入門

リスクコミュニケーションとは	リスクコミュニケーションの位置づけ リスクコミュニケーション手法について
事例研究	感染症 くすりのリスクと副作用 遺伝子組換え作物・食品 リスク報道
リスクコミュニケーションの実践	リスク情報の伝え方 リスクコミュニケーションのデザイン 演習